

〔まえがき〕

この本を手にとられた方は、百人一首がとても好きな方、百人一首かるたで遊んだことを懐かしく思われた方、そして、百人一首に興味を持たれた方だろうと思います。でも、本のタイトルをみて、「待てよ、『百人一首一夕話』って何かな?」と思われたからこそ、この「前書き」を読んで下さっているのだと思います。

『百人一首一夕話』は、江戸時代後期に書かれた百人一首の注釈書です。著者は尾崎雅嘉（一七五五～一八二七）です。大阪に生まれ育ち、通称春蔵（俊蔵）、字は有魚、号は蘿月と称しました。家業は医者とも、書店とも言われますが、いずれにせよ、和漢の書物を渉猟し、国書の解題集である『群書一覽』を執筆しました。また、和歌にも秀で、古今和歌集の注釈書である『古今和歌集鄙言』や、『百人一首一夕話』を著しました。これらは刊行された後、時代を超えて読み継がれ、人々に親しまれた書物であると言ってよいでしょう。

『百人一首一夕話』は「ひやくにんいっしゅひとよがたり」と訓みますが、百人一首の注釈書の筆頭に挙げられる『宗祇抄』以下、数多くの百人一首の注釈書の中でも、歌の解釈だけでなく、歌人の様々な逸話を記した点に特色があります。本書は架蔵版本を用いて本文を作成してありますが、作品解説に加えて歌人のエピソードなど、そのエッセンスを概要に凝縮してしました。版本には江戸時代後期に名古屋に生まれ、後に江戸に出て画家として、また有職故実家として活躍した大石貞虎（一七九二～一八三三）が描いた挿絵が入っています。紙数の都合により本書に全てを納めることはできませんでしたが表紙や裏表紙などに一部を使用しました。雰囲気をお楽しみ下さい。なお、作者名は『百人一首一夕話』の呼称に従いました。

最後になりましたが、本書は百人一首を理解するだけでなく、くずし字を習得することにも目的を置いています。なんて、気が多いと思われるかもしれませんが、このスピーディーな時代に一石二鳥位は狙わないと、と考えました。くずし字習得の極意は、「たくさん読む」ことです。当たり前だと思われるかもしれませんが、古文書調査でも手掛けない限り、大量のくずし字を読む機会はありません。博物館のガラスケースの前でもどかしい思いをした方もいらっしゃるでしょう。そこで、なるべく多くのくずし字に触れることができるように、歌だけをくずし字で読むという考えは捨てて、歌の解釈の部分はすべてくずし字で提示することにしました。師を頼んで教えるよりも良し、独学で読破しても良し、本書の使い方はそれぞれかと思いますが、この一冊を読み通した達成感は格別ではないかと思えます。

さあ、皆さん、百人一首の世界へようこそ！（城崎陽子）

凡例

翻刻をするにあたって、以下のような凡例にした。

- 一、本文の書き下しやふりがなは原則として版本のままとした。
- 一、旧漢字は通行の字体に改めた。
- 一、合字は開き、欠字は（ ）で補った。
- 一、読みやすさを考えて、便宜的に句読点を入れた。

〔P2〕

① 天智天皇

御幼名を葛城皇子とも中の大兄の皇子とも申奉り。御諱を天命開別天皇とも申奉る。天智とは平城の朝の御時に淡海真人御船といふ人代々の天皇の御徳を考へ、漢土の例にならひて諡を奉りしりかく称し奉る也。御父は舒明天皇、御母は宝の皇女、後に皇極天皇又齐明天皇とも申奉れり。

秋の田のかりほのいはの
とまをあらみわか衣手は
露にぬれつ、

此御製は後撰集秋中に題しらすとて入れり。御歌の意は、稲の実のりたる秋の田を鳥獸にあらさせしと、仮庵とて仮屋をたて、守り居るか、其庵をふきたる苦の目かあらき故中に居るわれらの袖か朝もよるも露にぬれつとして苦勞なる事そといふこゝろ也。これを天子の御身にてわか衣手と仰せられたるよし注するはわろし。天皇の御身をおしくたしたまひ、土民になりかはりてよませられたる御歌なれば、百姓の辛勞をいたはらせたまふ叡慮のありかたき也。衣手はすなはち袖の事にて、むかしは衣といふ字を衣と一字の訓によみたり。衣の手のあたる所なるゆゑこゝろもと訓したり。

〔P3〕

② 持統天皇

御幼名は鷹野讚良の皇女と申奉る。御父は天智天皇、御母は大田蘇我山田石川麿の女なり。文武天皇の皇后とならせたまひ後に帝位に即たまふ。文武天皇の大寶三年に崩したまへり。御諡を高天原広野姫天皇、又持統天皇とも称し奉る。

はる過て夏来にけらし

しろたへのころもほすてふ
あまのかくやま

しるたへのころもほすてふ。此御製はもと万葉集に入て、

春すきて夏は来ぬらし白たへの
ころもさらせりあまのかくやま

とありしを、新古今集に詞をその時代の風に直して入れられたるものか、又は伝へあやまりてかやうの詞になりたるかしりかたし。先万葉集にあるまゝの詞にて御歌のこゝろを解かは、春は過去て夏か来たるにや、民百姓とも白き着物ともか天のかく山あたりにはしてあるかよく見ゆるといふ事にて、奈良の都の禁裏より見わたしたまへるけしきをありのまゝによませられたるものなり。しろたへとはた、白き色といふ事にて、外の色に染ぬさきの着もの、色は皆白き故、むかしより白たへの衣とも白たへの袖とも歌により白たへの白妙とかく妙の字は仮字にて、万葉には多く白袴とかけり。袴の字は木の名にて、袴といふ木の皮をさきて衣に織たる故、外の色に染ぬ先を白袴といふ也。さらせりと

は日にほしてあるといふこゝろにて、此御時代は藤原の宮とて大和の高市郡か都にてありし故、禁裏よりほど近き十市郡の

香具山あたりなる民の家々に、夏になれば櫃より着物とをとり出してほしわたすさまを御覽してよませたまへる也。しかるに新古今集にも此百人一首にも衣ほすてふとか、れたるは不審なる事なり。すへて歌の詞に、てふといふはいふと云詞をつ、めたるものにて、恋をするといふことを恋すてふといへるか如し。しかれば、此御製に眼前衣のほしてあることを衣ほすてふとよませたまふへきにあらず。此故に百人一首の諸家の註釈、いづれも此歌の解にさまざまのむつかしき説ともをつけながら明らかに解得たるも見えず。こゝにひとつの考あり。後京極撰政良経公の月清集に、院の第二度の百首とてあり。その冬の歌のうちに、

雲はる、雪のひかりや白たへのころも
ほすてふあまのかく山

とよまれたり。此後京極殿は定家卿と同じ時代の人なるに、わか歌に持統天皇の御製を三句ながらそのまゝにてぬすみよみたまふへきにあらず。此後京極殿の歌のこゝろは、かの万葉集にある持統帝の御製のもさらせりあまのかくやまとよませたまへるは、夏のはしめのけしきなるを、今雲のはれたるあとの雪のひかりのましろにみゆるにつけて、むかし持統帝の衣さらせ